

# 「心の病」 が運命ならば



たくみ#

## 「心の病」が運命ならば

---

2011年7月。厚生労働省から、これ、までの四大疾病に「心の病」である精神疾患が新たに加わり、五大疾病とする方針が示された。

更にこれを受ける形で、2011年10月には、事業者に対し医師などによる従業員のメンタルヘルス（心の健康）チェックを義務付ける労働安全衛生法の改正案が示された。早ければ2012年秋にも施行される予定となっている。

「心の病」はもはや、これまで蔑視されていた特別な病ではなく社会問題として認識される時代によく突入したのだ。驚かされることは、これまでの四大疾病のどの病よりも罹患者が多いという事実。恐らく通院せず治療を受けずにいる罹患者（予備軍）を含めれば更に多くの数になるであろう。

「心の病」は社会的理解度が極めて低い。なぜならば、他の病と異なり客観的に病を患っていることが見てとれる身体の病ではないからだ。それが故に、病であるにも関わらず、病であることをひたすら隠し、独りでじっと耐え忍びながら療養を続けている方も多い。

その理由。「心の病」は自分には無縁の病だと思っている人が多い。そして「心の病」を患った人に対する偏見の目が少なからず存在するのだ。「心の病」は特別な人になる病であり、病を患った人の心の弱さに原因があると思われているのだ。

確かに人それぞれ心の強さには差があるかもしれない。しかし、病になるからには原因が必ず存在する。社会的問題になっているパワハラやセクハラなどに代表される仕事上の人間関係。業務多忙の継続による処理能力の限界。育児ノイローゼなどの家庭問題。そうした環境下でのストレスの蓄積により、ある日突然、まるで風船が破裂してしまったかのごとく、  
「心の病」が発病するのだ。

身体的病であれば、家族や知人、同僚は早期回復を願い、励まし、協力も惜しまず親身に接してくれる。

ところが「心の病」の場合は必ずしもそうではないのが現実である。病を患った人間を蔑視し、  
やもすれば「甘え」や「サボリ」と言った言葉で片付けてしまう。家族、知人、同僚からそういった目で見られることによって罹患者は更に精神的に追い込まれていくのだ。  
そして、誰からも相手にされず、孤独感が増すなか、耐え切れずに自ら命を絶つ最悪の結果を

招くことになる人も出てくるのだ。

私も実は「心の病」を患い2年半を超える闘病生活を今尚続けている。  
幸いにも私の家族や知人、同僚は、私を蔑視することなく、良き理解者となり、私の再起を  
信じて応援してくれている。幸いにも私は孤独な闘いを強いられてはいないのだ。

もし、「心の病」になることがその人の運命だとしたら、蔑視されることなく、孤独感に耐え  
忍ぶ  
こともなく闘病できる世の中になってくれることを強く願うばかりである。

「心の病」が運命ならば

<http://p.booklog.jp/book/37803>

著者：たくみ井

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/takumi626/profile>

著者ブログ：<http://ameblo.jp/takumi626/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37803>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37803>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.